

感覚環境のまちづくりシンポジウム（平成 20 年 12 月 9 日）

「奈良町の五感によるまちづくり ワークショップ報告」

社団法人奈良まちづくりセンター顧問 横井紘一氏

横井でございます。奈良から参りました。本来であれば、京都や鎌倉や金沢など、感覚環境のまちづくりにふさわしい町があるのではないかと思いますのですが、奈良は割と小さく、みんなでまちづくりをするのにはまとまりやすいまちだと思っております。

最近、奈良町とよく言われていますが、この奈良町というのは元興寺かいわいの狭いまちを指しております。本来は奈良市の東部、平城京の外京として大きく栄えたまちを奈良町と呼んでおりました。この大きな奈良町の中には、東大寺の大仏さんや奈良公園、JR奈良駅や近鉄奈良駅、商店街など奈良のまち全体を含めて奈良町だと思っただいた方がいかと思います。

その奈良町を中心として私たちはいろんなまちづくりワークショップを行っておりますので、今日はそのご説明をさせていただきたいと思っております。

ここが私たちが活動しております「奈良まちづくりセンター」です。1979年に設立してもう30年になりますけれども、160人ほど会員がおり、さまざまなまちづくり運動を行っております。例えば、まちづくり推進事業ではJR奈良駅舎の撤去・保存問題について、みんなで話し合い、保存運動をおこし、駅舎は現在も残っております。

また、「奈良町HOPE計画」、これは国土建設省の後援で、奈良町をこれから100年どのように生き続けさせるかという課題に市民、建築家、デザイナー、大学研究者が話し合い、模型をつくりながら発表するというものです。このような活動をまちづくり推進事業と呼んでおります。

二番目のまちづくり交流事業は、まちづくりに関わる人たちが課題を持ち寄り解決策を話し合う場です。奈良町だけではなく、奈良県内の歴史的なまちのまちづくりネットワークや各地から多くの研究者や行政の人たちが集まってきます。もう一つ、最近アジアの都市保全ネットワークというものを作りまして、ハノイ、シンガポール、タイの人たちと交流をし、私たちが現地に出かけていってまちづくりの応援をして帰ってくることをやっております。

3番目は、まちづくりの調査研究事業です。行政などと歴史的町並みの調査事業を行っております。以上が私たちまちづくりセンターの3つの大きな事業です。

現在、この奈良町はさまざまな問題を抱えています。一つは奈良の主幹産業である観光の問題です。観光客は年々減っております。特に、宿泊客が伸びて

いません。最近の奈良観光の特色は生活観光と言って、東大寺・大仏さんは見飽きた、むしろ奈良の人たちが古い町並みでどんな生活をしているのだろうかともちを見に来られる方が多いようです。

それで、だんだんみんなの地域の中に観光客が入ってきて、騒音とか安全性、例えば、救急車が入ってこようとも入れないとか、色々なケースが出てきて、これが1つの問題となっています。

また、奈良町に住んでいる人は高齢化しており、独居老人がたくさんいらっしゃいます。安心して暮らしていくのにどうすればよいか、お亡くなりになった空き家をどうするか身近な問題を抱えています。それが二つ目の問題です。三番目の問題は景観の悪化です。景観が守られているのは歴史的遺産周地域だけです。駅前、幹線道路は郊外型のショッピングセンターやパチンコ屋などがたくさん並んでいて、ここが本当に奈良のまちなのかというくらいまで景観が悪化しています。

そこで、私たちまちづくりセンターは、「ヒューマンスケールな（人間らしい）まちへの回帰」をテーマに景観問題に取り組んでおります。

「本来、景観とは、人間のすべての感覚器（五感）で感じるもの。景観を五感で感じ評価して、奈良のまちを再生しよう」ということで、五感によるまちづくりというプロジェクトを立ち上げました。

今回は2つプロジェクトをご紹介します。1つは、「五感による町歩き」です。もともと私が2002年に行った景観感性工学による奈良町の研究をもう少しフィールドワークで広げようと思い、一般市民参加公募制で2004年に2回、また2007年に学生を中心に計5回のワークショップを行いました。この「五感による町歩き」というのは、視覚とそれから聴覚と嗅覚と触覚、本当は味覚もあっていいと思うのですが、この四つの生理感覚を使ってみんなで五感調査シートを記入しながらまちを歩いてみようということです。

感覚受容の約8割が視覚だと言われています。ただ視覚は嗅覚、触覚、聴覚いろんなものを含めて構成されているのではないかと考えています。視覚を「色」と「形」と「素材」と三つに分けて、まちを廻ってみました。

緑や寺院の多い奈良公園周辺、古い町並みの元興寺周辺と中心市街地の商店街、奈良町を三つに分けて歩いてみました。

まず色ですが、奈良の色は、ねずみ系と茶系、それから奈良公園などの緑、この3つで70%以上構成されていました。ただし、高層で面積の大きい白いビルが最近多くなってきたというのが問題でした。

それから、形、これは大体いいと思います。

例えば、格子とか、むしこ窓、つまり通風口です。奈良町らしい形の町屋や鳥居の形などをたくさん見つけました。

それから、素材、これも大体よかったと思います。コンクリートやトタンなどの近代的な素材も見られましたが、木材、石・れんが・かわら、土壁、いろんなものを参加者が見つけてきました。次は臭覚です。スライド写真のおばあちゃんは一生懸命まちを歩かれました。帰ってきてまず言われたのは、ちょうど雨が降っていたので雨の匂いがしました、お寺のお線香の匂いも感じましたが、まちや住宅街には香りが感じられないということでした。他の方もみんな言っていました。嗅覚がありませんと。

それから、聴覚、音。たまたまチンドン屋さんがいて、このチンドン屋さんを聞きましたというのはたくさんありましたが、みんなが言っていたのは、観光客の話が一番多かったということと、それからもう一つ、子供の声が全くしなかったということでした。このまちは生きているんですかねというふうに、さっきのおばあさんを含め、帰って来られた方とは異口同音に言いました。子供の声が全くしないというのが今の奈良町の現状でした。

触覚、芝生とか土とか、いろんな体感のなかで面白いのはシカの糞です。シカの糞を踏むのはいい感触かどうかはわかりませんが、奈良らしい触覚です。最後に、せっかく歩いたのだから、皆さんの意見をまとめて提言をすることにしました。

「なららしいゆとり ～こどもたちの声が聞こえるまちづくり～」

奈良らしい景観とは、豊かな自然と歴史的建造物と人の目線に立ったヒューマンスケールなものではないか、車の騒音、排気ガスから、庭木の香る町、特に子供たちの声が聞こえるまちづくりをすすめたい。

豊かな自然、歴史的な物には囲まれているけれども、子供の声が聞こえないまちというのはまちではないのではないかとこのワークショップで私たちは考えた訳です。

次にワークショップⅡとして、今度は音だけに絞ってやろうと思いました。音によるまちづくりとはどのようなものかを探ることにしました。

「音風景とは、聞こえてくる情報により人間の心に像を結ぶ心象風景である」
「住民や訪れた人たちが音に気づき、音に愛着を感じ、音風景を再生できるまちづくりを目指そう」ということを目的として、この音風景プロジェクトを2年間行いました。

まず奈良町住民を対象にした音のアンケート調査を行いました。鳥の声、近所の人声など様々な音が聞こえてくるのですが、一番面白かったのは、興福寺南円堂さんの鐘の音でした。午前6時と午後6時に「ゴーン、ゴーン」と鳴るのですが、本当はこの周辺しか聞こえないはずですが、調査したら、遠く離れた所に住んでいるおばあさんが毎日定時に「ゴーン」という南円堂さんの鐘の音を聞いていると言われるのです。聞こえないはずなのに、不思議ですよ。

そこで、音というのは、人間の心に像を結ぶ心象風景ではないかと私たちはここで気づきました。

2番目に、「感じる音」というのを一度私たちでつくってみようと、庭づくりを始めました。場所は、奈良町物語館の小さな6坪ほどの裏庭です。音の専門家である大阪市立大学の中川先生に来ていただき、指導していただきました。まず庭づくりから始めて、庭木や花を植える、井戸の再生、それからならまちサウンドWALK、かまどづくり、そして次の春への支度ということで、1年間体験してみました。庭にどんな音が来るのだろうか、音というのは庭でつくれるのだろうかと思った訳です。

作業中に必ず5分間、音聞きの時間というのを設定しました。それで、音を皆さんで採集しました。参加した学生がこう言いました。音は常に、形、におい、感触などとともにあることが理解できた。音だけがひとり歩きしている訳ではないと。

先ほど、視覚がひとり歩きしているわけではないと申しあげましたけれども、音についても、色々な匂いとか感触など、あるいは視覚とともにあるということを経験しました。また、現代人が失いつつある、感覚機能を取り戻す試みが重要であるということも実感しました。これが音風景のプロジェクトの結果でした。

まとめますと、奈良町の現状としては、車の騒音が地域に侵入しているとか、香りが無いとか、子供の声が聞こえないなどの問題点があり、これからどう解決したらよいかを、今、私たちは考える必要があると思います。

奈良らしい独自の五感を伸長し復活させること。奈良のまちの水路は、溝を鉄板やコンクリートでふさいでいますので、ぜひ水面を復活しよう、それから香りのする庭木を植えたり、さえずりポケットパークなどをつくりまちに音や香りを再生することなどが考えられます。

また「五感のまちづくり」というのはスタートしたところですから、私たちが率先してまちの五感受容の育成・啓蒙をしなければならないのではないかと思います。奈良町八景の選定とか、あるいは五感による景観学校などをスタートさせていこうと考えております。

最後に、身近なヒントとして、奈良町には、実は五感生活そのものがあると思っています。スライドにあります「格子の家」、ここに座ると格子越しに子供が遊んでいる声が聞こえます、自分の子供や近所の子供の動静を格子越しに感じているのですね。今でこそ安心・安全と皆さん言われますが、これは昔からずっとやってきたことです。

それから、この家の裏庭はお隣だけではなく裏の家ともつながっており、昔から裏庭コミュニケーションをしてきました。

また、ここには家の中に坪庭というものがあります。わずか1坪の庭ですが、樹や花が植えられていて、鳥も来る、家のなかで四季を感じる、雨や雪を感じる、土壁の温かさに包まれて自然をいつも感じる空間があります。

それから、風が通りますので、井戸の水をまいて涼しくするといった省エネの工夫もこの町屋にあります。町屋の暮らし方から学び、活かす、創る、そういったお手本がまだ奈良町にはたくさんありますので、ぜひ皆さん、一度お出かけください。

これが私のご報告でございます。ありがとうございました。